

課題番号: 28-2

研究課題名: 薬物使用障害の病因・病態・治療反応性に関する多面的研究

主任研究者: 松本俊彦(NCNP 精神保健研究所薬物依存研究部部長)

分担研究者: 松本俊彦, 成瀬暢也, 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 船田大輔

## 1. 平成 29 年度の研究成果

「薬物使用障害患者における併存障害と依存症罹患脆弱性に関する研究」(分担: 松本)では、薬物関連障害患者 2262 例のデータを用いて薬物使用障害と併存する他の精神障害との関連を検討した結果、精神障害の存在が薬物使用障害罹患脆弱性を準備している可能性が示唆された。「薬物使用障害患者の入院治療プログラムの効果と治療転帰に与える要因に関する研究」(分担: 成瀬)では、H27~29 年度に埼玉県立精神医療センター依存症病棟に入院した薬物使用障害患者 120 例の後方視的情報収集により入院治療終了直後の状況を調べた結果、外来通院のみ 35.8%、外来通院+依存症集団療法 9.2%、外来通院+ダルク等通所 10.0%、ダルク等入所 7.5%、不明が 37.5%であることがわかった。「HIV 陽性者における薬物使用障害罹患脆弱性の要因とその支援に関する研究」(分担: 嶋根)では、HIV 拠点病院の HIV 陽性患者 362 例を分析した結果、HIV 陽性者の薬物依存症の重症度は低かったが、一部の重症例では、危険な性行動、注射器による薬物使用、注射器共有、抗 HIV 薬アドヒアランス低下が認められた。「薬物使用障害患者の外来治療プログラムの効果と治療転帰に与える要因に関する研究」(分担: 近藤)では、NCNP 病院薬物依存症外来患者 32 例を対象として、外来受診(外来診療単独)群 14 例と SMARPP(依存症集団療法)参加群 18 例との属性比較を行った結果、SMARPP 参加群の方が自身の薬物問題及び治療の必要性に対する認識や生活能力が高いという特徴を有することが確認された。「薬物使用障害を併存する触法精神障害患者の病態に関する研究」(分担: 船田): NCNP 病院医療観察法病棟入院患者 20 例と当院薬物依存症外来患者 41 例とのあいだでアルコール・薬物問題を比較した結果、重篤な精神障害の存在は、比較的軽度の物質乱用であっても事例化リスクを高める可能性が示唆された。

## 2. 平成 30 年度の研究計画と期待される成果

薬物関連障害患者に関する横断的調査、ならびに縦断的調査で得られた知見から、個別的な治療ガイドライン案の開発を実施する予定である。

## 3. 行政施策への貢献度

刑の一部執行猶予制度の施行、ならびに再犯防止推進法の成立以降における、わが国の薬物依存症者の地域保健・医療・福祉的な支援に大きく貢献する研究知見が得られたと考えている。

## 4. 研究発表

松本俊彦:薬物依存をめぐる法整備. 臨床精神医学 46(4): 437-442, 2017.

松本俊彦:物質使用障害. ト라우マティック・ストレス 15(1): 49-57, 2017.

松本俊彦:多剤処方の方の規制と背景. 臨床精神薬理 20(9): 975-982, 2017.

松本俊彦:司法機関から地域の支援資源にどうつなげるべきか. 臨床心理学 17(6): 814-817, 2017.

松本俊彦:ケミカルコーピングとオピオイド鎮痛薬. Locomotive Pain Frontier 6(2): 46-47, 2017.

松本俊彦:薬物依存症に対する最近のアプローチ. 精神科治療学 32(11): 1403-1404, 2017.

松本俊彦:専門医でなくてもできる薬物依存症治療-アディクションの対義語としてのコネクション-. 精神科治療学 32(11): 1405-1412, 2017.

谷渕由布子, 松本俊彦, 船田大輔, 川副泰成, 榊原聡, 成瀬暢也, 池田俊一郎, 角南隆史, 武藤岳夫, 長徹二:わが国の依存症専門医療機関における危険ドラッグ関連障害患者の治療転帰に関する研究. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 52(5): 141-155, 2017.

松本俊彦:特集 さまざまな精神障害の「病識」をどのように治療に生かすか. 精神神経学雑誌 119(12): 911-917, 2017.

成瀬暢也:誰にでもできる薬物依存症の外来治療, 精神誌, 119;260-268, 2017

成瀬暢也:危険ドラッグから学ぶ本邦における薬物依存, ペインクリニック, 38;169-178, 2017

成瀬暢也:わが国における薬物問題の現状と課題, 臨床麻酔, 41;9-17, 2017

嶋根卓也:性的マイノリティ・HIV 感染者の理解と支援. 精神療法 43(2):270-278, 2017.